

褚輔成著

大澤和錄
興
卷一



大修館書店刊

昭和三十年十一月三日 初版發行
昭和四十一年五月二十日 縮寫版第一刷發行
昭和五十一年七月一日 縮寫版第五刷發行

大漢和辭典 縮寫版 卷一

著者 © 諸橋 轍次

發行者 鈴木 敏夫

發行所 株式會社 大修館書店

東京都千代田區神田錦町三丁目二四番地

表紙圖柄

背模様 引繩直

定規に使はれた模様で、古代の獸類を圖案化したもの。裏面の銘に、方無回、直無曲、引斯繩、烟斯矚とある。

明、程大約撰「程氏墨苑」(明版)二十二卷、卷十所載(靜嘉堂文庫藏)

平模様 唐千秋萬歲鐵鑑

鏡の裏に使はれた模様で、河圖洛書を圖案化したもの。千秋萬歲富貴不斷の銘がある。

宋、王黼等奉敕撰、明、泊如齋等重修「宣和博古圖錄」(明版)三十卷、卷三十所載(靜嘉堂文庫藏)

見返し圖柄

表 明、盛茂華 山靜日長

宋の唐庚の醉眠詩、山靜似太古、日長如小年、餘花猶可醉、好鳥不妨眠、世味門常掩、時光筆已便、夢中頻得句、拈筆又忘筌により、山居閑靜の境遇を扇面に描いたもの。萬曆四十八年の作。

裏 明、王穉登書 鶴林玉露

宋の羅大經撰の「鶴林玉露」に錄する山靜日長の一段を扇面に寫したものの。表見返しの繪と同じ題材を用ひてたまたま對になつてゐる。萬曆三十年の作。

いづれも「雲煙養素」所載(靜嘉堂文庫藏)

背文字 田代秋鶴筆

扉文字 諸橋轍次筆

序

東洋の文化は、その大半が漢字漢語によつて表現せられてゐる。それは文藝に於ても思想に於ても、將た又道德宗教に於ても皆然りである。それ故、漢字漢語の研究を外にして東洋の文化を云爲することは不可能である。そこでこの寶庫を開く一つの方法として辭書の編著が考慮せられ、中國に於ても我が國に於ても早くその作品を見た。しかし實情から言へば、我が國從來の漢辭典は幾多の進歩があつたとは言へ、大體文字語彙の數が少なく、中國の辭典は康熙字典・佩文韻府等、大量のものはあるが、或るものは文字の解義だけで語彙はなく、或るものは語彙はあつてもその解釋がないといふ状態である。これでは學界の要求を充すわけには行かない。誰かこの缺を補つてくれる人はないものか、若し他にないとすれば、自分はその器ではないとしても進んでその任に當つてみよう、これが私の大漢和辭典の編著を企てた直接の動機である。

この志を立てたのは、今から數へれば可なり古い事である。書肆と一應の契約を結んだのは昭和二年であるが、實際の着手は更に三四年以前に遡ると思ふ。爾來拮据精勵、ともかくも昭和十八年には第一卷を發行した。續いて二卷三卷と刊行する豫定であつたが、二十年二月二十五日の劫火によつて一切の資料を焼失した。半生の志業はあへなく

も茲に烏有に歸したわけである。しかし當時は上下を擧げて國難に當つて居つた時であるから、別に悔みもせず、又落膽もしなかつた。不幸中の幸とも言はうか、全卷一萬五千頁の校正刷りが三部残つて居つた。そこで一部は手元に、一部は私の管理してゐた靜嘉堂文庫に、他の一部は故岩崎小彌太男の好意によつて甲州の山奥に藏した。かくて再擧の時を待つてゐたが、時事は日に日に非なるものが重なつた。そしてその年の八月十五日、遂に終戦の哀詔を拜することとなつたのである。

祖國が既にかかる一大變故に遭遇したのであるから、一箇の私の事業などはいかなる運命になつても仕方がないと一時は諦めたが、その後、時の經つにつれて又別の考へが起つて來た。それは著者としての責任感である。私は既にこの書の刊行を天下に公約した。現に第一卷を購入した多くの人々もある。それらの人々に對して、たとへ幾多の困難があるにしても、このままに事業を中止することは許されない。且つ又從來この書に對しては深い同情を寄せて下さつた多くの人々もあつた。それらの人々に對しても同様である。一面又、亡友その他嘗ての協力者に對する已み難い心情もあつた。川又武君は事業の當初から殆んど二十年に亘り精根を盡してくれた人である。又、渡邊實一君眞下保爾君、佐々木新二郎君も同様、長きは十年、短きも五七年、終始事業のため精勵してくれた。然るにこの四君は終戦と相前後して約一年の間に共々世を去つた。これは事業完遂の行程に於て私の受けた最も傷心の事柄であつた。この四人は共に大東文化學院の

出身である。外にも同學院の出身者で私に協力してくれた人々は少なくない。この事業の前半はそれらの人々が中心となつて分擔したのである。従つて私としては、これらの諸君の志を達成する意味に於ても、全卷の刊行を仕上げなければならぬ。

かかる心情のもとに私は、自らを鼓舞し自らを鞭撻しつつ殘稿の整理を始めたが、折も折、二十一年には私の右眼は全く失明した。左眼も殆んど文字を辨じ得ない状態に陥つた。心はあせつても整理は遅々として進まない。しかしかかる間にも私は又常に私を勵まし私を助けてくれる數名の心友をもつてゐた。その一人は六十年來の舊友であり、この事業のためにも今日に至るまで二十數年助力してくれた近藤正治君であり、他は私の最も信賴してゐる東京文理科大学出身の小林信明君、渡邊末吾君、鎌田正君、米山寅太郎君、その他の人々である。當時私は退官の身であり、且つこの書の刊行の見込みも立たなかつた時である。それにも拘はらず上記の諸君は、いかなる困難があつても協力は惜しまない、せめて原稿だけは完全に整理して、やむなくば知己を後年に待たうとさへ言つてくれた。そして今、現に全力を盡して事に當つて居るのである。

かくて私も愈々再舉の決意を固めて居つたが、その矢先、甲州の疎開地から歸京した大修館の鈴木社長が、上京早々、これ又再舉の事を申し出た。そして言ふには、自分は社運を賭してもこの事業を完遂する。それがためには、大學在學中の長男と仙臺二高在學中の次男とは共に退學、これに當らしめる。三男も今は若いが、他日大學卒業の後にはこの事

業に當らしめると。つまり一家の血肉を捧げて事業の完遂に當るといふのである。私は深くその誠意と決意に心を動かされた。偶々井上巽軒博士の紹介によつて、土橋八千太翁と相知るの機縁を得た。翁は時既に八十を超えた高齢であるに拘はらず、これ亦進んで整理に協力する事を申し出てくれた。爾來三四年、翁の好意によつて補正を得た事も少なくないのである。

さて愈々事を進めてみると、原稿整理の外に又色々の困難が起つて來た。その主なるものの一つは、文字の製作である。この辭書には約五萬の親文字を收めてゐるが、以前に用ひた活字は既述の如く全部焼失したので、これを改めて木版に彫り、更に活字を作るとすれば、少なくとも十年二十年の歳月を要する。更に現實の問題として、木版の製作者にその人を得る事が出来なかつた。かかる困難の時に際して、ここに又幸にも一人の協力者を得た。それは寫眞植字の發明家である石井茂吉君である。同君は他に幾多の有利な事業を抱へて居る身ではあるが、この辭典の事業が永遠のものであるといふ觀點から、自分一生の仕事として全力を擧げて協力しようと申し出てくれた。かくて終戦後又十年、上記幾多の人々の好意と協力とによつて着々事務も進捗し、今日ここに本書刊行の運びとなつたわけである。思へば私は身の不徳にも拘はらず、幸にも多くの知己を得た。私の事業は決して私一箇の事業ではない、蔭に隠れた幾百の人々の力の綜合である。特に上記諸人の協力に負ふの多い事は、茲に明記して感謝を捧げねばならぬ。

事業完成までには尙ほ四年の歳月を要する。過去十年殆んど失明同様の状態にあつた私は、幸今春、名醫の手術によつて隻眼を開いた。今後は一息の存する限り、本書の完成に努力しよう。そして藝林の榛莽を披き、辭海の遺珠を拾ふに力めよう。それが私の素志を貫く所以であり、且つ又學界に公約した義務を果す所以である。ただ何分にも微力の身であるから、成果の上には幾多の不足もあらう、缺點もあらう、それらについては江湖有識の諸君子の教正を仰ぎ得れば幸甚である。更に後來、五十年百年繼續して本辭書に手入れをする適當の學者が出て、完全なる漢和辭典を大成してくれる事ともなれば、獨り私の望外の喜びであるのみならず、これこそ東洋文化宣揚のため學界の一大慶事であると思ふ。私は切にその事を希望して已まない。

昭和三十年十一月三日 文化の日

遠人村舎に於て

諸 橋 轍 次 識 ず

凡 例

採録の範圍

一 本書に採録した文字は、正字の外、略字、俗字及び國字等を含む。

資料は殿版康熙字典を中心としたが、外に説文、玉篇廣韻集韻字彙正字通中華大字典、その他の字典類等をも参照して補正した。

一 語彙は普通の成語、故事熟語、格言俚言、詩文の成句、及び人名地名書名官職名年號動植物名等を主としたが、外に法律經濟その他の學術語、及び普通の現代時文中國語をも載せ、佛教語邦語はその普通のものだけを採録した。

上記の語彙を採録した資料は經史子集に互る古典を中心とし、外に古今圖書集成淵鑑類函佩文韻府駢字類編、その他辭源續辭源辭通辭海國語辭典等、一般著名の各種辭書類をも大方参考し、かたはら公文書研究書新聞雜誌の類からも

選擇した。

一 人名は本名で掲げた。「蘇東坡」を「蘇軾」とし、「白樂天」を「白居易」とする類である。外に字、號諡室名尊稱諱名帝王の廟號諡號等も別項として收めた。我が國の人名は主として漢學に關係あるものに限つたが、これは號を以て掲げた。「賴襄」を「賴山陽」とするの類である。又、

一 地名は中國の古蹟名勝その他文化と生活に影響のあるものを主とし、日本の地名は主要地の外は「丁子」をヨホロガと訓むが如き難訓のものだけを取つた。又、外國の主要な地名の漢譯をも若干收めた。

一 書名は四庫全書總目提要所載のものなどは勿論、近代作家の主なものをも收録し、叢書はその細目をも列記した。我が國の書名も若干は掲げたが、それは主として漢文で書かれたものに限つた。

古典の篇名及び著名な詩文樂府戲曲等の題名

はそれぞれ別項として収載した。

一 官職名は中國歴代官職名の主なものを掲げ、その職掌沿革等を説明した外、若干我が國のものをも採録した。

一 年號は我が國及び中國のものは勿論、その他東洋諸國の漢字を用ひたものはすべて網羅した。

文字の解説

一 文字の解説は、先づ正しい字形を示し、次に字音字義を説明し、外に解字参考名乗の諸項を附設した。

一 字形は主として殿版康熙字典に準據し、更に他書を参考して、六書の本義に遡り、字形の史的變化を尋ね、且つ近代通行の形態をも參酌して、慎重に決定した。

篆文には小篆古文籀文或體等を採録して、文字の沿革を知らしめた。資料には主として説文、說文段注、說文通訓定聲、及び六書分類、六書正譌等を用ひた。

一 字音は片假名を用ひて記した。一字に二音以上ある場合には、□□□等の記號を用ひて區別を明かにした。

漢音吳音は反切に本づき、實際の用例を參酌して決定し、これを並記する場合は漢音を右に吳音を左に掲げた。且つ兩音同一なもの又は併記の必要のないものは、單に一音を記載するに止めた。

我が國には漢音吳音の外に、慣用音があり、又後世、中國音の影響に本づいた唐音がある。これ等は、囗囗の記號の下にこれを置いた。

用例の多い普通の文字には、注音符號及びウェード式發音、記號法によつて現代中國語の發音を明示した。

反切は集韻廣韻を中心とし、更に廣く各種の韻書字書を涉獵してこれを掲げた。

韻は韻府群玉佩文韻府等に從ひ、近世通行の百六韻の分類法に依つた。

一 字義の解説は先づ主な訓義を簡單にゴシック

體で示し、更に明朝體を用ひて細説した。音によつて意義の異なる時は、それぞれ字音のㄅㄆㄇの記號の下にこれを分説した。

一 佛教語及び國訓と稱して我が國だけに行はれる訓義は、それぞれ團及び囀の記號の下にこれを説明した。

一 名乗の項に於ては、我が國の人名に用ひられる特殊の訓を列舉した。

一 解字の項に於ては、主として象形指事會意の三種の文字について、その文字の構造と本義とを説明し、更に各種訓義の發生する經路をも明かにした。

一 參考の項に於ては、字形字音字義に關する疑義異說等を説明し、本文に於て盡し得ない點を補足した外、字形類似の文字を掲げてその異同を指摘した。

語彙の解説

一 語彙の解説は、簡潔平明を旨とし、分り易い口語

を用ひた。從來の辭典の解釋中、その適解と思はれるものは、成るべく多く採り入れた。

一 語彙の解説は、その文字に即した直接的解釋を第一としたが、外にその轉義應用をも示し、又同義語類語があれば、これを掲げて解釋の補助とした。

一 語彙には、出典もしくは引用例を附載した。但し、現代の中國語と新造邦語とは、特別の場合の外は引例を省いた。

一 彼此參照を要する語彙が二箇所以上あれば、それぞれの卷數と番號とを明示して相互參照の便に資した。その場合は、或は説明の補足を意味し、或は出典の參照を意味し、或はその兩者を兼ね意味するものである。

一 重要な書名の解説には、その書に關する參考書を掲げて研學の便に資し、叢書はすべて子目を列舉してその内容を明かにした。

一 語彙の讀方は、片假名を以て記した。但し、現代の中國語だけはウェード式發音記號法によつ

て表はした。

同じ意味で兩様の讀方のあるものはこれを並記し、讀方の異なるに随つて意味も亦異なる場合は各項の始に別々の讀假名を施した。すべて或る項に施した讀假名は、以下の諸項に通じて適用するものである。

一 語彙の解説の順序は、先づ漢語としてその語を説明し、次に現代中國語、次に佛教語、次に邦語といふ順序によつたが、讀方の異同又は解説の便宜によつては若干その順序を變へた。

一 語彙の説明を助けるため、若干の圖表や插圖を用ひた。插圖は主として三禮圖、禮記圖、名物圖、金石索、西清古鑑、正續三古圖、古今圖書集成、收錄圖、大清會典圖、協紀辨方書、漢晉印章圖、譜、攀古廬彝器款識、三才圖會、和漢三才圖會等によつた。

出典及び用例

一 出典用例は、和漢の原典によつて正確にこれを引用し、且つ書名の外、細かに篇名、項目、題名又は

卷數を掲げた。

一 原典を引用する順序は、字書、經書を先とし、他は概ね書物もしくは作者の時代順とした。

一 引用文にはすべて句讀點、返點を施し、中に省略する部分があれば、「云云」として前後を連結した。

一 引用文に適當な注のあるものは、成るべくこれを附載して解釋の據る所を明かにした。

文字・語彙の排列

一 本書の文字の排列は、主として康熙字典の例に従つた。即ちすべての文字を先づ二百十四部の部首順に分類し、各部首内の文字は畫數順に排列した。而して各文字の下には、その文字を頭字とする語彙を次項の如く排列した。

一 語彙の排列は二字のもの、三字のもの、四字のものといふやうに、字數の多少によつて先づ分類し、同じ字數のものの中に就いては五十音順に排列した。但し、キエヲは便宜上イエオの次に

置いた。三字以上の語彙で、最初の二字三字が語を成すものは、それぞれ二字三字の後に附載した。「一意」の後に「一意奉_レ上」を置くの類である。又返讀の熟語は他の熟語の最後に置いた。「傲_レ世忘_レ榮」を「世」の字の四字熟語の最後に置くの類である。同じ返讀熟語相互の先後は、これを直讀した際の音の順序とした。「震_レ主之威」を「背_レ主投_レ營」の前に置いた類である。

解説の形式

- 一 一語を二つ以上の項目に分けて説明する場合は●●等の記號を用ひてこれを區別し、一項の中に於て更に細説を要する場合は、適宜①②③④⑤等の記號を使用した。
- 一 一つの文字に或體古字俗字略字など幾つかの字體のある場合は、その説明を通行の正字の下に統一し、他の字體の下に在つては、單に某字に同一なることを説明するに止めた。
- 一 同一字で二つ以上の韻のある場合は、□□を以

てその音を表はし、韻の變化によつて字義に變化のある場合は、それぞれ上記の□及び□に分屬せしめた。又當該文字の屬する韻は、□内の文字でこれを表はし、四聲は文字の四隅に小圈を附けて

□ 平聲 □ 上聲 □ 去聲 □ 入聲

のやうにこれを示した。

一 年號には、すべて洋數字で西曆紀元を附けた。

本書の檢索

一 本書收載の文字には、ゴシック體數字で「文字番號」を附け、その文字に屬する語彙には明朝體數字でそれぞれの「語彙番號」を附けた。この二つの數字が、すべて本書檢索の基準である。

一 各頁の上の欄外の數字は、その頁收載の文字語彙の最初と最後との番號を示し、解説の文中に引いた數字は、参照すべき文字語彙の卷數と番號とを示す。

一 版心(柱)には、その頁に收載する文字及びその

文字の屬する部首並びに畫數を明示した。版心の下部の縦書き數字は、各卷別の頁數を示し、下の欄外の洋數字は、全十二卷を通じての追頁數を示す。

全十二卷を通じての文字語彙の詳細な索引は、別に一巻としてまとめ、各卷毎にも亦それぞれの部首及び文字の索引を作つて卷首に附け、以て檢索の便を圖つた。

略符其の他

一 本書の解説中に用ひた略語

國 現代中國語

〔例〕現代時文の用例

佛 佛教語

邦語 國訓

國 我が國で作られた文字

慣用音

唐音

一 引用書名及び傳注の略稱

易 易經

書 書經

詩 詩經

禮 禮記

春秋 春秋經文

左氏 春秋左氏傳

公羊 春秋公羊傳

穀梁 春秋穀梁傳

逸周書 汲冢周書

戰國 戰國策

呂覽 呂氏春秋

晏子 晏子春秋

文中子 王通中說

新論 劉勰新論

注 其の書の原注（三禮の鄭玄注、春秋左氏傳

の杜預注、荀子の楊倞注の類。）

傳 書經の孔安國傳 詩經の毛傳

箋 詩經の鄭玄箋

皇疏 皇侃の論語義疏

集傳 〓 朱子の詩經集傳

集注 〓 朱子の論語孟子集注

章句 〓 朱子の大學中庸章句

蔡傳 〓 蔡沈の書經集傳

段注 〓 段玉裁の說文解字注

會箋 〓 竹添氏の詩經左氏傳論語會箋

現代中國語發音の記號

イ 四聲の記號

上平聲 下平聲 上聲 去聲

注音符號

ウエード式

1 2 3 4

但し、一字に二つ以上の四聲のあるものは、Y^{ai}のやうに記載した。

ロ 熟語の表音はすべてウエード式により、四

聲記號のないものは輕聲を意味する。又、

接尾語「兒」の子のつく前の語はその末尾の

音が消滅又は少し變化するが、本書ではそ

のままに残した。

例へば

一點兒 i⁴ tien³ êrh

一塊兒 i² k'uai⁴ êrh

の類である。

發音符

イ 讀假名はすべて歴史的假名遣に従つた。

ロ 二つ以上の假名で表はされる長音又は拗

音は、中間に「ー」を附けてその長音又は拗

音であることを示した。「アフ」は「オー」

「クワ」は「カ」「クワウ」は「コー」と發音すべ

きことを示したのである。

卷一所載 總文字

部首順による檢字

親文字の下に記した洋数字は其の文字の番號。
和数字は其の文字を掲載した頁。

檢字 (部首引)

卷一 所載 總文字

部首順による檢字

親文字の下に記した洋数字は其の文字の番號。
和数字は其の文字を掲載した頁。

万 10 二畫	方 9 二畫	下 8 二畫	上 7 二畫	七 6 二畫	古 5 二畫	己 4 二畫	万 3 二畫	丁 2 二畫	一 1 一畫	部		
丑 23 二畫	𠂔 22 二畫	𠂔 21 二畫	与 20 二畫	不 19 三畫	𠂔 18 三畫	𠂔 17 三畫	𠂔 16 三畫	𠂔 15 三畫	下 14 三畫	上 13 二畫	三 12 二畫	丈 11 二畫
引 36 二畫	丙 35 二畫	𠂔 34 二畫	丘 33 二畫	世 32 二畫	世 31 二畫	丕 30 二畫	且 29 二畫	𠂔 28 二畫	𠂔 27 二畫	𠂔 26 二畫	𠂔 25 二畫	且 24 二畫
兩 51 二畫	𠂔 50 二畫	𠂔 49 二畫	𠂔 48 二畫	𠂔 47 二畫	𠂔 46 二畫	𠂔 45 二畫	𠂔 44 二畫	𠂔 43 二畫	𠂔 42 二畫	𠂔 41 二畫	𠂔 40 二畫	𠂔 39 二畫
𠂔 63 十五畫	𠂔 62 十畫	𠂔 61 九畫	𠂔 60 八畫	𠂔 59 八畫	𠂔 58 八畫	𠂔 57 八畫	𠂔 56 八畫	𠂔 55 八畫	𠂔 54 八畫	𠂔 53 八畫	𠂔 52 八畫	𠂔 51 八畫
𠂔 74 三畫	中 73 三畫	中 72 三畫	𠂔 71 二畫	𠂔 70 二畫	𠂔 69 二畫	𠂔 68 二畫	𠂔 67 二畫	𠂔 66 二畫	𠂔 65 二畫	𠂔 64 二畫	𠂔 63 二畫	𠂔 62 二畫
𠂔 86 八畫	𠂔 85 八畫	𠂔 84 八畫	𠂔 83 八畫	𠂔 82 八畫	𠂔 81 八畫	𠂔 80 八畫	𠂔 79 八畫	𠂔 78 八畫	𠂔 77 八畫	𠂔 76 八畫	𠂔 75 八畫	𠂔 74 八畫
𠂔 97 二畫	𠂔 96 二畫	𠂔 95 二畫	𠂔 94 二畫	𠂔 93 二畫	𠂔 92 二畫	𠂔 91 二畫	𠂔 90 二畫	𠂔 89 二畫	𠂔 88 二畫	𠂔 87 二畫	𠂔 86 二畫	𠂔 85 二畫
𠂔 107 二畫	𠂔 106 二畫	𠂔 105 二畫	𠂔 104 二畫	𠂔 103 二畫	𠂔 102 二畫	𠂔 101 二畫	𠂔 100 二畫	𠂔 99 二畫	𠂔 98 二畫	𠂔 97 二畫	𠂔 96 二畫	𠂔 95 二畫
𠂔 122 二畫	𠂔 121 二畫	𠂔 120 二畫	𠂔 119 二畫	𠂔 118 二畫	𠂔 117 二畫	𠂔 116 二畫	𠂔 115 二畫	𠂔 114 二畫	𠂔 113 二畫	𠂔 112 二畫	𠂔 111 二畫	𠂔 110 二畫